

『説文解字』に見える医学用語と

『素問』との関連について

藤山和子

『説文解字』

『説文解字』（以下『説文』）は、後漢の許慎が文字の正確な解説こそは古典研究—学問研究の第一歩、ひいては国を治める第一歩との認識から、和帝永元十二年（西暦一〇〇年）に著した字書である。見出し字は秦代の字体である小篆を基本とし、それに古文、籀文（大篆）を配し、収録字数はすべてで九千三百五十三字（重文一千百六十三字⁽¹⁾）である。採集の材料となったのは、許慎の自叙によれば、秦代になって周代の字体である大篆をやや簡略にした小篆で書かれた秦の丞相李斯の手になる『倉頡篇』、車府令趙高の『爰歴篇』、太史令胡毋敬の『博学篇』、さらに漢代の楊雄の同じく小篆で書かれていたと思われる『訓纂』⁽²⁾に至る文字の学習書であり、それらの総字数は五千三百四十字であったという。残りの四千十三字は他書から採集したもので、段玉裁によれば、それは班固の『十三章』、賈魴の『滂喜篇』、司馬相如の『凡将篇』、『漢書』芸文志に記載されている『別字』十三篇などが許慎の依拠した資料となったであろうと推測している。以上の他に、前漢武帝の末年、孔子の子孫の家から出てきた倉頡作る所の古文と、周の宣王の大史が学童に教えるために作った『史籀篇』⁽³⁾（『大篆』）が重文のための材料となった。許慎の子の沖の言によ

『説文解字』に見える医学用語と『素問』との関連について

れば、許慎は編纂に当たって「博く通人に問い、これを賈逵に考え、説文解字を作」ったとあり、その範囲については「六芸群書の詁、皆その意を訓ず。而して天地鬼神、山川草木、鳥獸虫蟲、襍物奇怪、王制礼儀、世間人事、畢く載せざるはなし」という。

このような『説文』には、病氣、治療、人体の部位など、医学に関連のある文字も数多く収録されている。許叙に沿って考えるならば、これら医学関係の文字も『倉頡篇』以下の小学の書より取り、文字の解説に当たっては広く先達の見解を尋ね、取捨選択を加え、字形を基に本義と音を明らかにしたものといえる。例えば、

7150 𩑦 (十一篇下) 血の理分の体中を衰行する者なり。𩑦に从い血に从う。「小篆は𩑦」

0756 𩑦 (二篇上) 咽なり。口に从う益の声。𩑦籀文の𩑦。上は口に象り、下は頸脈の理に象るなり。

4491 𩑦 (七篇下) 𩑦に入りて穴を刺す、これを𩑦やうと謂う。^① 穴に从う甲の声。

〔段注①〕蓋し古医経の言ならん。

「𩑦」の小篆と「𩑦」の籀文は、𩑦の説解がいう血脈は人の体内を斜めに流れるという説明を視覚的に分からせてくれる。また「𩑦」の説解について、段玉裁は古医経の言だろうといっている。右の例のように、字形及び説解の中にその文字成立当時の医学や医学書が反映しているということは考えられるが、叙から見る限りは許慎当時の医学が直接『説文』に反映しているということは考えにくいことなのである。しかし一方では、当時の流行思想である三才思想や陰陽五行思想が許慎の説解に強く反映しているということもよく知られていることである。まず、『説文』の編成そのものにそれらの思想が影響している。『説文』には五百四十の部首があるが、阿辻哲次氏の『漢字学』⁽⁴⁾に依れば、部首は単体字の筈であるのに、「𩑦」(十篇上)と「能」(十篇上)の二字は「𩑦、兔の足に从い、首の声に从う」、「能、肉に从う、目(目)の声」とあるように複体字である。にもかかわらずこの二字が部首に建てられているのは、

『易』の陰の数六と陽の数九の積五十四の十倍の数に揃え、その数によって天地間すべてのものが生成発展する原理を示す必要があったからだという。⁽⁵⁾ またその部の配列も全書の初めに天を置き(「天」の字は「一」部に属す)、末尾のほうに「地」を象徴する「二」の部を置き、「人」の部は全書の中間に当たる八篇の上に置かれ、人は天地の中間に位置するとの観念を表しているという。さらに全書の最末尾には、「甲」から「癸」間までの十干と、「子」から「亥」に至る十二支の干支の文字がそれぞれ部首として並べられており、陰陽五行思想を背景に、陰と陽の生成消滅の解釈が一括して述べられているという。つまり『説文解字』は中国古代の最も普遍的である陰陽五行説を基礎に、文字を媒介として築き上げた文字宇宙であるとのべている。恐らく、子の沖が「山川草木、鳥獸虫蟲、裸物奇怪、王制礼儀、世間人事、畢く載せざるはなし」とのべているのも、あらゆる文字を収録したという事実とともに、許慎がこのような宇宙観をもって『説文』を編纂している以上、森羅万象、万物のすべてを『説文』の中に網羅し得たことになるという許慎の哲学をも説明しているのであろう。

許慎が上記のような宇宙観に基づいて『説文』を編纂したとすると、個々の説解に三才思想や陰陽五行思想が反映していることもうなずける。次の字などはその例である。

0074 王(一篇上)天下の帰して往く所なり。董仲舒曰く、古の字を造る者、三画して其中を連ぬくをこれを王と謂う。三は天地人なり。而してこれを参通する者は王なり。孔子曰く、一もて三を貫くを王となす。

6396 心(十篇下)人の心。土の臧なり。身の中に在り。象形。博士説に以て火の臧となす。凡そ心の属、皆心に从う。

2499 腎(四篇下)水の臧なり。肉に从う取の声。

2500 肺（四篇下）火の藏なり。博士説に以て金の藏となす。肉に从う市の声。

2501 脾（四篇下）木の藏なり。博士説に以て土の藏となす。肉に从う卑の声。

2502 肝（四篇下）金の藏なり。博士説に以て木の藏となす。⁽⁶⁾肉に从う干の声。

「王」については董仲舒の説を引いて天地人の三才を縦に貫くものが王であるといっている。また、「心」以下五臓、とくに形声字である「腎」「肺」「脾」「肝」の四臓は、本義の説明はさておいて、古文尚書・今文尚書では五行の何に配当されるかという説明のみに終わっている。いずれも当時の三才思想、陰陽五行思想が説解に反映している例といえる。しかし、甲骨文が発見されてみると、「王」の字体は⁽⁶⁾横の三線も縦の一線も元来のものではなかったことが明らかになった。皮肉なことに、許慎が熱意をこめて当時の高度に達した文明社会の自然観なり哲学なりを背景にして文字の形を説いたところは、かえって疑問とすべきところが多いのである。⁽⁷⁾

許慎当時の医学書

当時、医学書はどのような状況にあったかという点、後漢の班固が著した『漢書』芸文志に依れば、その方技略医經には『黄帝内經』十八卷、『黄帝外經』三十七卷、『扁鵲内經』九卷、『扁鵲外經』十二卷、『白氏内經』三十八卷、『白氏外經』三十六卷、『旁篇』二十五卷、七部が、また経方には、『五藏六府痺十二病方』三十卷を始めとする、主として処方に関する十一部の書物が記載されている。『漢書』が成ったのは章帝の建初七年（西暦八二年）であるが、『漢書』芸文志は班固が劉歆の『七略』七卷に依って編集し『漢書』の一篇としたもので、著録に際して『七略』との間に異同のある場合は、班固が自注でそれを明らかにしている。それに依ると、『漢書』芸文志が新たに増したものは劉向、楊雄、杜林の三家に過ぎず、医經・経方ともに『七略』と出入がないことがわかる。つまり『漢書』芸文

志の医経・経方に記載されている書物は、劉歆当時のもの、さらにいうならば、その時代は前漢の成帝河平三年（前二六年）に秘府の典籍の亡佚が甚だしかったため、広く民間に求めさせ、劉歆の父の劉向らがそれらの書物の校訂を始めた頃にまで溯らせなければならぬ。『漢書』芸文志を通じて知ることができるのは、許慎が『説文解字』を完成させた約百三十年前の図書情報なのである。

これら医経・経方に記載されている書物のうち、現在ほぼその大要を知り得るのは『黄帝内経』十八巻のみである。しかしそれも、いわれるように『内経』十八巻はそのまま後の『素問』九巻・『靈枢』九巻³なのかどうか、違ふとしたらどこが違うのか、などは不明のままである。

一九七三年に長沙の馬王堆三号漢墓から出土した古医書群について、山田慶児氏は戦国時代後期、紀元前三世紀の半ばごろまでに書かれたもので、その中の数篇は後の『黄帝内経』（『素問』・『靈枢』）に収められている数篇の論文の祖型であると考証している⁹。それら馬王堆出土古医書の内容は、まだ十一経脈であり、各経脈間も相互に連絡してない。経脈と臓腑の結びつきは部分的である。病の治療法も主として灸療法と砭石療法であるのに対し、『内経』は十二経脈が出揃い、絡脈によってそれらが相互に連絡している。経脈は臓腑と結びついている。治療法も鍼灸療法が主で、灸療法と薬物療法が補助的に用いられていることなどを考えると、馬王堆の古医書から『内経』十八巻に至るまでの間に、医学の世界には画期的な進歩があった模様で、その新時代を開くに足る医学の進歩が、『漢書』芸文志に記載されている『内経』十八巻以下の書物の編纂をもたらしたのではないかと考えられる。同じように、『内経』十八巻成立後百年程の間に大きな医学の理論的進歩があり、それが要因となって『素問』九巻・『靈枢』九巻の成立となったのではないかと推測している。

『素問』陰陽応象大論篇は人体の生理・病理及び養生・診断・治療に至るすべての医学の理論は、天人相関思想を

根本にした陰陽五行説に導かれると述べている。後にも記すように、筆者はこの医学的な五行説を一応の完成の域にまで導いたのが、「長夏」の語の創出であり、それに基づいて編み出された五行的に武装された寸口診であると考えている。⁽¹⁰⁾ 五行的に武装された寸口診の確立により、医学はより体系的に五行説を駆使して診断・治療・予後を述べることが可能となったのである。つまり、医学的五行説の完成が『内経』十八巻成立後の、次のエポックメイキングとなる医学の進歩を示しているのではないか、少なくとも『素問』九巻の成立には、そのことが大きく影響していたのではないかと考えている。

許慎が『説文』をまとめた頃には、当然のことながら『漢書』芸文志以後に書かれた多くの書物があつたに違いない。とりわけ方技に関する書物は技術と学説の進歩にともない、つぎつぎと書き換えられていったことだろう。医学も今述べたように前漢末から後漢にかけて絶えざる進歩があつた筈である。もつとも、それら新情報のすべてを許慎が目にしていたと考えるのは、あまりにも現代的な考えかたであるが、それでもなお、説解の中に時の流行の思想を取り入れている許慎が、『説文解字』をまとめるに当って、これら医学の学問状況をどの程度視野に入れていたかは興味のあるところである。

『説文』と『素問』を繋ぐ思想

先述した『素問』の陰陽応象大論篇にもあるように、天人相関思想は『素問』『靈樞』全書を貫く重要な基本思想であり、全編至るところにこの思想はちりばめられている。今論述の都合上『素問』についてのみその代表的なものを見てみると、

帝曰く、五藏四時に応じ、各おの收受あるか。岐伯曰く、あり。東方は青色、入りて肝に通じ、……。 (金匱真

言論篇)

清陽は天となり、濁陰は地となる。……故に清陽は上竅に出で、濁陰は下竅に出づ。(陰陽応象大論篇)

帝曰く、余聞く、……。四時陰陽、尽く經紀あり。外内の応、皆表裏あり、と。其れ信に然らんか。岐伯対えて

曰く、東方は風を生ず。風は木を生じ、木は酸を生じ、酸は肝を生じ、肝は心を生ず。(陰陽応象大論篇)

天は人を食うに五氣を以てし、地は人を食うに五味を以てす。(六節藏象論篇)

天覆い地載せ、万物悉く備わるも、人より貴きは莫し。人は天地の氣を以て生じ、四時の法もてなる。……。天

地氣を合する、これを命けて人と曰う。人能く四時に応ずる者は、天地これが父母となる。(宝命全形論篇)

などなど、枚挙に遑なき程である。これらの例からも分かるように、ここで天地といているのは自然と同義語である。したがって天地は四時という語で表現されることもある。それら自然に対し、人はどのように語られているかという、人は天地の氣が合してできたものであり、天地間に存在する万物のうち最も貴いものである。その人の健康を保ち命を永らえることと、天地陰陽の変化とは密接な関係にあるといている。つまり、医学書の中で天地人の三才は、自然対人という構図でとらえられており、人は自然(天)と陰陽五行の氣によって感応するのである。

『説文』においても天地人は同じように説明されている。

808 地(十三篇下)元氣初めて分かれ、軽き清陽は天となり、重き濁陰は地となる。万物の陳列する所なり。

473 人(八篇上)天地の性の最も貴き者なり。

段玉裁は「地」の説解の注に『素問』の《陰陽大論》の「帝曰く、地はこれ下となすや否や。岐伯曰く、地は人の下たりて、太虚の中なるものなり。帝曰く、馮りたるか。岐伯曰く、大氣これを挙ぐるなり」を引いて、重濁の地は輕清の氣の中に包みこまれ持ち挙げられているために、墜ちることがないのだといている。段玉裁は《陰陽(応象)

大論』といているが、実はこの文は後人の竄入といわれている《五運行大論篇》の文である。《陰陽応象大論篇》にあるのは、先にも引いたように「清陽は天となり、濁陰は地となる」という文である。しかし、いずれにせよ、天地の解釈に関して『説文』と『素問』との間に密接な関係があるということ、段玉裁が指摘していることに変わりはない。また、「人」の説解の注では、段玉裁は『礼記』礼運篇の「人は其れ天地の徳、陰陽の交、鬼神の会、五行の秀気なり」「人は天地の心なり。五行の端なり。味を食らい、声を別ち、色を被りて生ずる者なり」を引いて、禽獣草木はみな天地から生じたものではあるが、天地の中心となることはできない。ただ人だけが天地の中心となることができるのである。だから人は天地が生じたものの中で最も貴いものであり、天地と能く徳を合するものである、といっている。

天地陰陽の気が合して人となり、人は万物の中で最も貴いものであるという説は、『説文』や『素問』のみに特徴的なものではなく、『淮南子』精神訓にも「是に於いて乃ち別れて陰陽となり、離れて八極となる。剛柔相成し、万物乃ち形す。煩気は虫となり、精気は人となる」とあるように、漢代にあっては珍らしいことではない。医学書とこれら漢代の書物との影響関係を簡単に述べることはできないが、『説文』と『素問』の間にこれだけの一致がみられるということは、少なくとも時代の宇宙観に基づいた、同じ思想基盤に立っているということはいい得るであろう。

説解中に用いられている漢代の医学用語

字形及び説解の中に、その文字が成立した頃の医学が反映している例については先述したが、漢代のものと思われる医学用語も見いだすことができる。僅か一例とはいえそれが重要と思われるのは、『説文』が『素問』と同じ宇宙観の上に立って、その思想を体現する医学用語として、説解中に積極的に使用されていると思われるからである。

5188 尺（八篇下）十寸なり。人の手より十分を却く動脈を寸口となす。十寸を尺となす。尺、規槩の事を指尺する所以なり。尸に从い乙に从う。乙は識る所なり。周の制、寸・尺・咫・尋・常・仞の諸度量、皆人の体を以て法となす。凡そ尺の属皆尺に从う。

1894 寸（三篇下）十分なり。^①人の手より一寸を却く動脈、これを寸口と謂う。又一に从う。^②凡そ寸の属は皆寸に从う。「小篆は彡」

〔段注①〕度は分を別ち、寸を付る。禾部に曰く、十髪を程となし、一程を分となし、十分を寸となすと。

〔段注②〕却是猶お退のごときなり。手を距てること十分の動脈の処、これを寸口と謂う。故に字は又一に従う。会意なり。

「寸」の小篆「彡」は、「又」の小篆「彡」（手を表わす象形文字）に「一」を加えたもので、手首から一寸のところにある「寸口」を示しているというのである。「寸口」とは、手の橈骨動脈上の脈診部位である。この寸口で脈を診る診方はいくつかの方式がある。尺寸診といって尺膚（肘の尺沢から手首までの皮膚部位）の状態と寸口で診た脈とを比較する方法。人迎脈口診といって頸動脈上の脈診部位の人迎で陽氣を、脈口（寸口）で陰氣を診て比較する方法。寸口で胃の氣の有無多少を診て、五臓の氣、病の深淺輕重死生の時を知る方法などである。『素問』はこの三種の脈診法すべてに言及しており、『説文』のいう寸口がそのどれを指しているか、寸口の語だけからは特定することはできない。さらに、『史記』扁鵲倉公列伝に、倉公が脈口（寸口）で脈を診たという記述もある。名称の上からは以上のどの寸口に当てはめることも可能である。しかし、内容からみて、説解のいう寸口は最も時代的に新しい、寸口で胃の氣を診る寸口診を指しているものと筆者は考えている。この寸口診は新しく「長夏」の語が創出されたこ

とによって、四時を五時に読みかえることが可能となり、その結果完全に五行を脈診の中に吸収し、相生説・相尅説を活用して五臓の氣、病の深淺輕重、死生の時を知ることができるようになったのである。このように五行的に武装された寸口診は、天人相関思想を根幹とした陰陽五行思想を体現した脈診法ということができ、許慎にとって非常に重要なものと映ったであろう。それは、以下の寸部の字や「封」字に見られるように、「寸」を構成要素として持っている字は、法度に関係があるといっていることから窺われる。

1895 寺 (三篇下) 廷なり。法度ある者なり。寸に从う之の声。

〔段注①〕天子の三朝は各方百歩なるを知るも、其の諸侯大夫の制は未詳。歩は必ず寸を積みてこれをなす。法度をいうの字多く寸に従う。又部に曰く、度は法制なりと。

1896 将 (三篇下) 帥なり。寸に从う醬の省声。

〔段注①〕必ず法度ありて而る後以てこれを主どり、これを先んず可し。故に寸に従う。

1897 得 (三篇下) 理に繹ぬるなり。工口に从い、又寸に从う。工口は乱なり。又寸はこれを分理するなり。三の声。此れと設と同意。人の臂を度りて得となす。八尺なり。

1898 專 (三篇下) 六寸の簿なり。寸に从う衷の声。

〔段注①〕玉藻に曰く、笏の度は二尺有六寸と。此れ法度なり。故に其の字は寸に従う。

1899 專 (三篇下) 布くなり。寸に从う甫の声。

〔段注①〕凡そ敷敷は必ず法度ありて而かる後行わる。故に寸に従う。

1900 導 (三篇下) 引なり。寸に从う道の声。

〔段注①〕これを引くに必ず法度を以てす。

「封」の説解では、直接制度と「寸」を結び付けている。

8662 封（十三篇下）諸侯に爵する之の土なり。之土に从い、寸に从う。寸は其の制度を守るなり。公・侯は百里、伯は七十里、男は五十里。

また、「度」については、次のようにいう。

1843 度（三篇下）法制なり。① 又に従う度の省声。②

〔段注①〕論語に曰く、権量を謹み、法度を審らかにすと。中庸に曰く、天子に非ざれば、度を制せず。

今天下の車軌を同じくすと。古者五度、分・寸・尺・丈・引、これを制という。

〔段注②〕周制の寸・尺・咫・尋・常・仞は皆人の体を以て法となす。寸は人の手の寸口に法り、咫は中婦人の手の長さ八寸に法り、仞は臂を伸ばして一尋なるに法る。皆手に於いて法を取る。故に又に従う。

「寸」と法度の結び付きには、単に「寸」が度量の基礎的単位というだけではなく、法度を象徴する意味をも担わせられているように思う。『中庸』に「天子に非ざれば、度を制せず」というほど「度」は重要なものであり、国の基である。『説文』の叙で許慎は次のように述べている。

（孔子が没して）其の後、諸侯力政し、王に統べられず、礼楽の己を害するを悪みて、皆其の典籍を去る。分かれて七国となりて、田・疇は畝を異にし、車・途は軌を異にし、律・令は法を異にし、衣・冠は制を異にし、言語は声を異にし、文字は形を異にす。

このように乱れた国を、いま、許慎は文字の本義を探求し、文字の正しい解釈のもとに古典研究を行い、それによって田・疇の畝、車・途の軌、律・令の法、衣・冠の制を正し、天子の制した度を復活し、道のあるところを明らか

にし、国家を安定に導こうというのである。一方、寸口は全身状態の情報の発信の場であり、その脈診部位から時代の思想である陰陽五行を活用して得られる情報は、身体保全の基である。人体における寸口での情報は、国家運営における度にも等しいという意識が、「寸」と法度を結びつけさせたのであろう。

しかし、このような許慎の解釈には疑問がないわけではない。許慎は「尺」の説解で「周の制、寸・尺・咫・尋・常・仞の諸度量、皆人の体を以て法となす」としており、段玉裁も「度」の注に同様の文を引いている。しかし、「咫」が「中婦人の手の長さ八寸に法り」、「仞」が「臂を伸ばして一尋なるに法る」のに較べ、「寸」が人の手首から脈の搏動部までの長さをものさしとして計るといふのはいかにも不自然である。ものさしとするには、「手の長さ」「臂を伸ばした長さ」のように、分かりやすく、計りやすいものでなければならぬ筈である。一寸の長さはもともと「十髪を程、一程を分、十分を寸」(程 七篇上)と決まっております、たまたま手の橈骨動脈上の脈診部位が手首から一寸の位置にあったため、寸口と名づけられただけのことであろう。寸口の別称として脈口・氣口があるということは、そのへんの事情を説明しているのかもしれない。

「寸」の甲骨文は発見されていないため、どのような形のものであったか分からないが、小篆の「寸」⁽¹²⁾について、許慎とは異なる解釈をする説もある。白川静氏は「手指の形に一をそえる。手指を四本並べた形はわが国のへつかゝにあたり、その指一本の幅を寸とする」といい、『大戴礼』主言篇の「指を布きて寸を知り、手を布きて尺を知る」を挙げてその証としている。⁽¹²⁾ものさしとしては、こちらのほうがはるかに使いやすい。小篆の横線を親指と考えればさらに計りやすくなる。戦国から漢代にかけて一寸の長さは、出土文物によれば約二・三センチであり、⁽¹³⁾親指の幅は當時の一寸の長さにはほぼ一致する。また、「寸」を構成要素にもつその他の字、例えば「寺」字についても、白川静氏は「寸は手にもつこと」⁽¹⁴⁾であるとして、法度とは無関係であることを示している。

許慎が「寸」の字形を説明するのに寸口を以て説くのは、ちょうど「王」の字形の説明に天地人の三才を以て説いたの説いた同じ誤りを犯しているのではないかと思われる。そして、許慎を誤った方向に導いたのも、同じく当時の流行思想である。

しかし、いま「寸」の説解が誤りであるかどうかはさておくとして、このように許慎が寸口に拘った理由に注目したい。その理由は先にも述べたように、寸口が時代の宇宙観を体現する語であり、そこでの情報を利用するならば、人体の五臓の氣、病の深淺輕重、死生の時を知ることができ、人体にとっては最も重要な脈診部位であるということ、を許慎が知っていたからだと考えたい。

もしその推測に間違いがないならば、五行的に武装された寸口診の完成は『説文』成立の西暦百年以前であり、それを契機として編纂されたであろう『素問』の成立も、西暦百年前後と考えられる。

注

(1) 現在に伝わる版本で数えると、これより七八字(重文百十一字)多い。お茶の水女子大学 説文会編『加番説文解字』(二九一九)参照。なお本論ではテキストとして『説文解字注』(上海古籍出版社 一九八一)を用い、臆脈、臧臧など、字体の不統一はそのままにした。見出し字上の算用数字は『加番説文解字』に依る。『素問』のテキストは郭霽春主編『黄帝内経素問校注』(人民衛生出版社 一九九二)を用いた。

(2) 福田襄之助氏は『中国字書史の研究』(明治書院 昭和五四)第二編 第一章の中で、徐鉉の『篆韻譜』の序「先儒許慎云云、作説文解字十五篇凡萬六千字、字書精博、莫過於是、篆籀之體、極於斯焉、其後賈勛以三倉之書爲隸字、隸字始廣、而篆籀轉微」を引いて、倉頡五十五章は勿論、楊雄の訓纂三十四章も篆籀で記してあったものを、滂熹を続ぐに及んで、隸字に改めたものであると述べている。

『説文解字』に見える医学用語と『素問』との関連について

(3) 『漢書』芸文志 六芸略 小学に「史籀十五篇」とあり、その注に「建武時亡六篇矣」とあるところをみると、許慎の頃もまだ「史籀篇」数篇を見ることは可能だったのであろう。

(4) 阿辻哲次『漢字学』—『説文解字』の世界— 第一部『説文解字』の構成(東海大学出版会 一九八五)参照。

(5) 福田襄之助氏も『中国字書史の研究』第二編 第一章 第六節で、部首の数と易との関連について述べている。前注(2)参照。

(6) 肺・脾・肝の説解を段玉裁に従って改めた。

(7) 頼惟勤監修 説文会編『説文入門』第一章 第七節(大修館書店 一九八三)参照。

(8) 晋の皇甫謐がその自著『鍼灸甲乙経』の序で、『内経』十八巻とは『素問』九巻、『鍼経』(靈枢の古い名称)九巻のことであると述べて以来、それが通説となってきた。

(9) 山田慶児『中国医学の思想的風土』Ⅱ章(潮出版社 一九九五)参照。馬王堆出土の医書に関する記述は石田秀実『中国医学思想史』第二章(東洋叢書7 東京大学出版会 一九九二)にもある。

(10) 拙論『黄帝内経素問』の寸口診について(『お茶の水女子大学紀要』四九号 一九九六)参照。

(11) 「必ず寸をつみてこれをなす。法度をいうの字多く寸に従う」(『寺』字注)という段玉裁は、むしろ度量の基礎単位としての「寸」を重視しているようにみえる。そのように段が考えるについては、段の寸口診の理解に限界があったからだろう。「寸」字の注で『周礼』の注を引いて「脈の大候、要は陽明・寸口に在り」といって、説解のいう寸口を、人迎脈口診の寸口ととらえている。

(12) 白川静『字統』(平凡社 一九八四)参照。

(13) 中国国家計量総局主編 山田慶児・浅原達郎訳『中国古代度量衡図集』(みすず書房 一九八五)参照。

(14) 前注(13)参照。